

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

昆陽池の鮒
薬師如来の導き
えいがしま
エイと一緒に祈りをする



伝説 昆陽池の鮒
薬師如来の導き
えいがしま
エイと一緒に祈りをする

紀行 民衆が敬愛した高僧
・行基
・昆陽池
・昆陽寺
・有馬温泉と温泉寺
・東播磨の行基

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

昆陽池の鮒

薬師如来の導き

1200年以上も昔、まだ、奈良に都があったころのお話です。行基上人（ぎょうきしょうにん）というえらいお坊さんが、日本全国を旅していました。行基上人は、行く先々でため池を造ったり、水路を開いたりして、人々を助けながら仏様の教えを広めていたのです。

ある時、さみしい猪名野（いなの）を歩いていた上人は、道ばたにたおれていた老人に気がついて立ち止まりました。

「もし、どうなさいましたか。」

上人がたずねると、老人は苦しそうに答えました。

「病気を治すのに有馬へ行こおもて、ここまで来たんやけど、体がしんどくなった。もう三日も飯食うとらへん。何ぞ食うもん持ってしめへんか。」

老人をよく見てみると、体中に瘡（かさ）ができて、そこから膿（うみ）が出ているというひどいありさまでした。そこで上人は、旅のお弁当の干し飯（ほしいい）を取り出してやりましたが、老人は、「あかん、あかん。わしゃ生の魚でも食わんと、元気が出えへんわ」と言います。そこで上人は、わざわざ長洲（ながす）の浜まで行って、漁師に魚をわけてもらいました。そして、魚の片身を料理して食べさせてやりました。

上人が残った片身を昆陽池（こやいけ）に投げこむと、不思議なことに魚はそのまま泳ぎ始めて、池の中へ消えてゆきました。昆陽池には、このときの魚の子孫の「片目の鮒（ふな、片目の金魚という伝説もあります）」が、今でも住んでいるということです。

ひょうご伝説紀行 「昆陽池の鮎」「えいがしま」

さて、上人は老人を背負って有馬温泉に向かいましたが、そのとちゅう、老人は苦しそうに言いました。

「体中のできものが膿(う)んで、ウジがわいて、痛うて、かゆうてたまらんわ。お坊さん、膿をなめて、ウジを吸い取ってくれへんかいな。ほたら少しは治るとおもうんやけど。」

ふつうならとてもできることではありません。けれどもこれを聞いた行基上人は、老人をおろすと、ひどく膿みただれた老人のはだをなめ、ウジを吸い取り始めました。するとどうでしょう。上人がなめたところが、どんどんと黄金色にかがやき始めたではありませんか。気がついてみると、老人の姿は、いつの間にか光りかがやく仏様に変わっていたのです。

上人は「あっ」とひれふして、おがみました。

「私は薬師如来(やくしにょらい)です。上人をためすため病人に姿を変えていましたが、上人の慈悲(じひ)の心はよくわかりました。これから有馬へ行って、病気の人たちを救ってやりなさい。」

こうして行基上人は有馬へ行き、さびれ果てていた温泉をたてなおして、多くの病気の人を助けることになったのです。

行基上人は、このときの薬師如来の姿を像に刻み、お堂を建てて祭りましたが、それが現在の温泉寺のはじまりだということです。また別の伝説では、薬師如来を祭る寺を建てようと考えた行基上人が、東に向かって木の葉を投げ、それが落ちたところに建てたのが昆陽寺(こんようじ)だとも伝えています。

えいがしま

エイと一緒に祈りをする

昔、難波（なにわ＝現在の大阪）から瀬戸内（せとうち）の海を通る航路は、とても大切な海の道でした。ふだんはおだやかに見える瀬戸内海（せとないかい）ですが、たくさんの島や浅瀬がありますし、明石海峡（あかしかいきょう）のように潮の流れが速いところもあるので、風や波がはげしいときにはたいへんあぶなくなるのでした。

そこで行基上人は、安全に航海できるようにするために、摂津国（せっつのくに）から播磨国（はりまのくに）にかけて、五つの港を築いたと言われています。明石の魚住の泊（うおずみのとまり）の工事は、大変な難工事でした。特に冬の間は、西風が強くふき、播磨灘（はりまなだ）の荒波が打ち寄せます。行基上人が工事を始めると、上人の徳をしたってあたりの村から次々に人が集まってきました。工事は何年もかかり、なかなかはかどりませんでした。何百人、何千人もの人々が、海の底をさらって深くし、ていぼうを築き、長い間かかってようやく港が完成しました。

港の完成を祝って、上人が仏様においのりをしていると、大きなエイが泳いできて、海の中からいっしょにいのったということです。そこで村人たちは、このエイに酒をふるまって帰ってもらいました。それ以来、この地を「エイが向かう島」、江井ヶ島（えいがしま）と呼ぶようになったということです。

その後、魚住の泊は風や波のためにたびたびこわれましたが、多くの人の手によって修理されて、今の江井ヶ島港に受けつがれています。港のそばには、行基上人が開いた長楽寺（ちょうらくじ）があって、上人が刻んだという石のお地藏様が残されているそうです。

紀行「民衆が敬愛した高僧」

行基

行基（ぎょうき）は大仏建立にも尽力した、奈良時代の高僧である。単に高い位についたということではなく、行基自身が生涯の多くを民衆の間に置き、人々のために尽くしたことが、彼が「菩薩（ぼさつ）」とまでたたえられ、敬愛される理由である。行基の高徳は広く語り継がれて、いろいろな伝説を生んだ。その中には、死んだ魚が泳ぎだすといった超自然的な部分もあるけれど、どちらかという、人の病や暮らしに関わるようなものが目につくように思う。

実際に民衆の間で生き、人を救った行基なればこそ、こうした伝説が数多く生まれたのだろう。人が身近にすぐれる存在。それこそが行基伝説の姿なのである。

行基伝説の地は多い。この伝説紀行でもどれを選ぶか、ずいぶん迷った。ここに挙げるものだけでは到底足りないとは思えけれど、自分自身の行基を探してみるというのも面白いのではないだろうか。

昆陽池



昆陽池の景観



昆陽池の景観

昆陽池（こやいけ）は行基が天平3年に築造したという、農業用のため池である。伊丹市（いたみし）から池田市にかけての台地は、古くから「猪名の笹原（いなのみささはら）」と呼ばれ、農業用水の不足する地域であったようだ。行基はこの地に昆陽施院（こやせいん）を建てて農民を救済し、また自ら水田を開墾したという。

現在の昆陽池は、かなりの部分が埋め立てられて、かつての半分ほどになったというが、それでもおよそ28haもの面積がある。周囲のかなりの部分は、人工林とはいえ高さ10m近くに育った林に覆われて、住宅が集まる市街地に大きな潤いを与えている。

昆陽池を何より有名にしているのは、渡り鳥であろう。冬場はガン・カモ類を中心に、5000羽を超えるということで、写真を撮影に来る人も多い。池の中に造られた日本列島は、鳥たちのよい休み場となっているらしい。

1300年前に造られた池が、長い時間をかけてよい環境をつくりだし、それが現代の都市に住む人も救っている。池の役割は変わっても、行基の心はみごとに活かされているのではないだろうか。子孫に財産を残すということはこういうことなのだ、水面を眺めながら思わずにはいらなかった。

ひょうご伝説紀行 「昆陽池の鮒」「えいがしま」

昆陽寺

昆陽寺（こんようじ）は、行基が作った昆陽施院をもとに聖武天皇（しょうむてんのう）が建てた寺で、昆陽池の南1km半ほどの所にある。少し遠回りになるが、池からは「行基上池溝道」をたどるのも良いだろう。わずかではあるが、古い道の雰囲気をとどめる場所も残っている。

国道171号線に面した、朱塗りの堂々とした山門を入ると、落ち着いた境内である。もともとあった伽藍（がらん）は、織田信長（おだのぶなが）が荒木村重（あらかむらしげ）を攻めた際に焼け落ち、現在の建物はいずれも江戸時代に再建されたものだが、山門と観音堂、以前の山門に置かれていたという広目天（こうもくてん）、多聞天像（たもんてんぞう）が県の文化財に指定されている。また寺の本尊は、行基自らが彫ったという薬師如来像（やくしにょらいぞう）である。



昆陽池と昆陽寺(撰津名所図会)



昆陽寺
(撰播記)



昆陽寺の門



本堂



観音堂

昆陽寺の周りには、行基が開いたという井戸や、昆陽の宿跡などもある。西国街道に沿った旧跡を歩くのも、楽しいだろう。

有馬温泉と温泉寺



有馬温泉
(撰津名所図会)



有馬温泉の入り初め
(撰津名所図会)



温泉風景
(撰津名所図会)

有馬温泉は、『日本書紀（にほんしょき）』の舒明紀（じょめいき、7世紀）にも登場するほど、古くから知られた温泉地であったが、その後は衰微していた。その再興につくしたのが行基である。伝説にもあったように行基はここを訪れて、温泉寺を建てた。以来、平安時代末の僧仁西（にんさい）、羽柴秀吉（はしばひでよし）などの尽力によって数度の天災や戦災を越え、現在に至っている。



温泉寺



有馬の町



古い温泉街の風景

温泉寺も、この興亡を経験しながら継続して明治を迎えたが、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）によって堂塔のほとんどが取り壊され、わずかに残された薬師堂を引き継いだのが、現在の寺となったそうである。

潤沢な湯量の温泉源



東播磨の行基

江井ヶ島



江井ヶ島港



江井ヶ島港

行基の足跡は播磨（はりま）にも多い。明石市（あかしし）には、行基が造った魚住泊（うおずみのとまり）を元に発展した、江井ヶ島港（えいがしまこう）があり、周辺にもゆかりの寺院がある。

江井ヶ島港は、山陽電車江井ヶ島駅の南にある。駅から出て海に向かうと、黒い焼き板の壁の古い酒蔵わきを通り、ほどなく潮の音が聞こえて海岸沿いの道に出会う。その右手が江井ヶ島港である。

海沿いの道は浜の散歩道。海岸沿いに藤江川（ふじえがわ）を渡り、明石川の河口まで続く道である。途中には、「明石原人」発見の地や、ウミガメが産卵する浜などもあり、車は通れないから、散歩やサイクリングの人も多い。この付近は、海から見ると切り立ったがけが続くので、それを見立てて屏風ヶ浦（びょうぶがうら）海岸とも呼ばれている。

その散歩道から少し海岸へ降りた場所に、江井ヶ島の由来を書いた碑が立っている。朝日、夕日を撮影する名所にもなっていて、休日の夕方など、カメラがずらりと並ぶ。

長楽寺

港を見下ろす高台に村がある。古くからあった村の中の道は、細く入りこんでいて、ちょっとした迷路のようだ。その路地を、地元の人に尋ねながら長楽寺（ちょうらくじ）へたどりついた。

この寺は、行基が刻んだ地蔵尊を祭ったのが始まりとされている。長楽寺の近くには、やはり行基が開基の定善寺（じょうぜんじ）もあって、こちらは行基作の薬師如来が本尊である。

そこから西へ、海岸沿いの道を行くと赤根川（あかねがわ）を渡る。その少し奥まった場所には、三木合戦の際、秀吉に落とされた魚住城跡がある。その先には江井ヶ島の酒蔵が建ち、住吉神社と魚住漁港（うおずみぎょこう）で道は終わる。このあたりの海岸が、『万葉集』にも歌われた名寸隅（なぎすみ）の浜である。



長楽寺



説明板

名寸隅の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに
藻塩焼きつつ 海人娘子 ありとは聞けど 見に行かむ よしのなければ ますらをの
心はなしに たわや女の 思ひたわみて ためぐり 我れはぞ恋ふる 舟楫をなみ

玉藻刈る 海人娘ども 身に行かむ 舟かぢもがも 波高くとも
行きめぐり 見とも飽かめや 名寸隅の 舟瀬の浜に しきる白波

（笠金村（かさのかなむら） 巻6 935～937）

用語解説

【行基】ぎょうき

奈良時代の僧（668～749）。河内国（かわちのくに）出身。父は百済系の渡来人であった。はじめ官大寺で修行したが、後に民間布教をおこなったため律令政府の弾圧を受ける。ため池や水路などのかんがい施設を整備しながら説教をおこない、広く民衆の支持を集めた。東大寺の大仏造営にも協力し、745年には大僧正となった。墓は奈良県生駒市の竹林寺にあり、1235年に金銅製の骨蔵器が発掘されたが、現在はその断片が残されるのみである。

【昆陽池】こやいけ

伊丹市昆陽にあるため池。奈良時代の高僧行基の指導で築造された、「昆陽の大池」である。1972年から都市公園として整備され、現在に至る。面積28.5haの池は、特に冬季の渡り鳥の渡来地として有名である。

【昆陽寺】こんようじ

「こやでら」は通称。

伊丹市にある真言宗の寺院。山号は崑崙山（こんろんさん）。一般には「行基さん」の名で親しまれている。行基が建てた昆陽院（昆陽施院）が元になり、天平5（733）年、聖武天皇の勅願によって建立された。織田信長の兵火にあって16世紀後半に焼失したが、後に再建された。本尊の薬師如来は行基作と伝えられる。

観音堂と朱塗りの山門は県指定文化財。また、山門内に安置されていた持国天、多聞天の像は、平安時代中期の様式をもち、ともに県指定文化財となっている。

【有馬温泉】ありまおんせん

神戸市北区にある温泉。『日本書紀』にもその記録があり、日本最古の温泉のひとつである。

有馬温泉の最古の記録は『日本書紀』で、631年9月に舒明天皇（じょめいてんのう）が行幸して入浴したとある。その後衰微したが、行基が724年に再興。平安時代には白河法皇・後白河法皇も行幸し、『枕草子』にも三名泉としてあげられている。

承徳年間（1097～1099）に山津波の被害を受けるが、建久2（1191）年に大和国吉野河上高原寺（かわかみこうげんじ）の住職仁西上人が再修、薬師如来を守る十二神将になぞらえ12の坊舎を建てた。豊臣秀吉はこの湯が気に入り、夫人を連れてたびたび訪れたという。江戸時代には貝原益軒（かいばらえきけん）が『有馬湯山記（ありまとうざんき）』を記し、湯治場として繁栄した。県内では但馬国の湯嶋（城崎温泉）とともに江戸時代一、二を競う名湯とされた。都から近い事、設備が整っている事、名所やみやげが多い事、湯の種類が多い事などの数々の魅力で、江戸時代から現在まで変わらず観光客をひきつけている。

有馬は、地質学的には活断層「有馬高槻構造線」の西端にあり、断層の亀裂を通して地下深くから温泉水が噴出している構造だとされる。泉源によって泉質が異なり、塩分と鉄分を多く含み褐色を呈する含鉄強食塩泉、ラジウムを含むラジウム泉（ラドン泉）、炭酸を多く含む炭酸泉がある。空気に触れると着色する含鉄強食塩泉を「金泉」、それ以外の透明な温泉を「銀泉」と呼んでいる。温泉の熱源については定説がない。

ひょうご伝説紀行 「昆陽池の鮒」「えいがしま」

【温泉寺】おんせんじ

兵庫県神戸市北区にある黄檗宗（おうばくしゅう）の寺。有馬山と号する。本尊は薬師如来。縁起によれば、724年、行基によって開かれたとされ、仁西を中興の祖とする。

1576年に火災で全山焼失したが北政所によって再建された。その後再び火災にあい、現在の薬師堂は1582年に建立されたものである。明治時代初めの廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）で、豊臣秀吉が有馬大茶会を開催したとされる阿弥陀堂も含め、薬師堂以外の堂塔は全て取り壊された。その後、廃寺となった旧温泉寺の奥の院であった黄檗宗清涼院が寺籍を継いで現代に至る。

【廃仏毀釈】はいぶつきしゃく

排仏毀釈とも書く。明治の初年、政府による神仏分離、神道国教化政策によっておこった、仏教に対する弾圧・排斥運動。1868年の神仏分離令によって、全国各地で神官や国学者などが中心となり、寺院、仏像、仏具などを破壊し、多数の寺院が廃寺となった。1875年に信教の自由が通達されて鎮静化。

【明石原人】あかしげんじん

1931年に古生物学者・考古学者の直良信夫（なおらのぶお）によって、明石市西八木海岸で発見された、ヒトの左寛骨（腰骨）の呼称。実物は1945年に空襲によって焼失した。石膏（せっこう）模型と写真が残されており、戦後、これを研究した東京大学の長谷部言人（はせべことんど）が、北京原人に近い人類と考えて「ニッポナントロプス・アカシエンシス」の名を与えたことから、明石原人と呼ばれるようになった。近年の研究では、現生人類（ホモ＝サピエンス）と同じ特徴をもつとされ、原人説は否定されたため、単に明石人骨と呼ぶことが多い。

【屏風ヶ浦】びょうぶがうら

明石市八木から江井ヶ島に至る約1.4kmの海岸線。海に面して、高さ10mほどのがけ面が続くため、この名がある。

【長楽寺】ちょうらくじ

明石市大久保町江井ヶ島にある寺院。行基の開基とされる。行基の位牌（いはい）、座像や、魚住泊（うおずみのとまり）を築造中に行基が彫ったという地藏像などを伝えている。なお江井ヶ島周辺には、行基が開基と伝える寺院が多く、長楽寺から西の二見港までの間に、定善寺（じょうぜんじ）、薬師院（ポタン寺）、観音寺（行基作という観世音菩薩像）、威徳院などがある。

【江井ヶ島の酒蔵群】えいがしまのさかぐらぐん

江井ヶ島周辺は、17世紀ころから「西灘」とも呼ばれ、酒どころとして知られてきた。これは、東播平野の酒米と、良質の地下水に恵まれたためとされる。現在も、黒い焼き板壁の酒蔵が残り、レンガ造りのウイスキー蒸留所もある。

ひょうご伝説紀行 「昆陽池の鮒」「えいがしま」

【魚住城】うおずみじょう

明石市魚住にある、中世の城跡。南北朝時代、赤松長範によって築かれた。天正6（1578）年には、魚住頼治が毛利氏に味方し、別所氏が籠城（ろうじょう）する三木城へ兵糧を運ぶための基地となったが、羽柴秀吉によって妨げられ、成功しなかった。三木城の落城とともに廃絶。1998年の発掘調査によって、堀割（ほりわり）の一部がみついている。

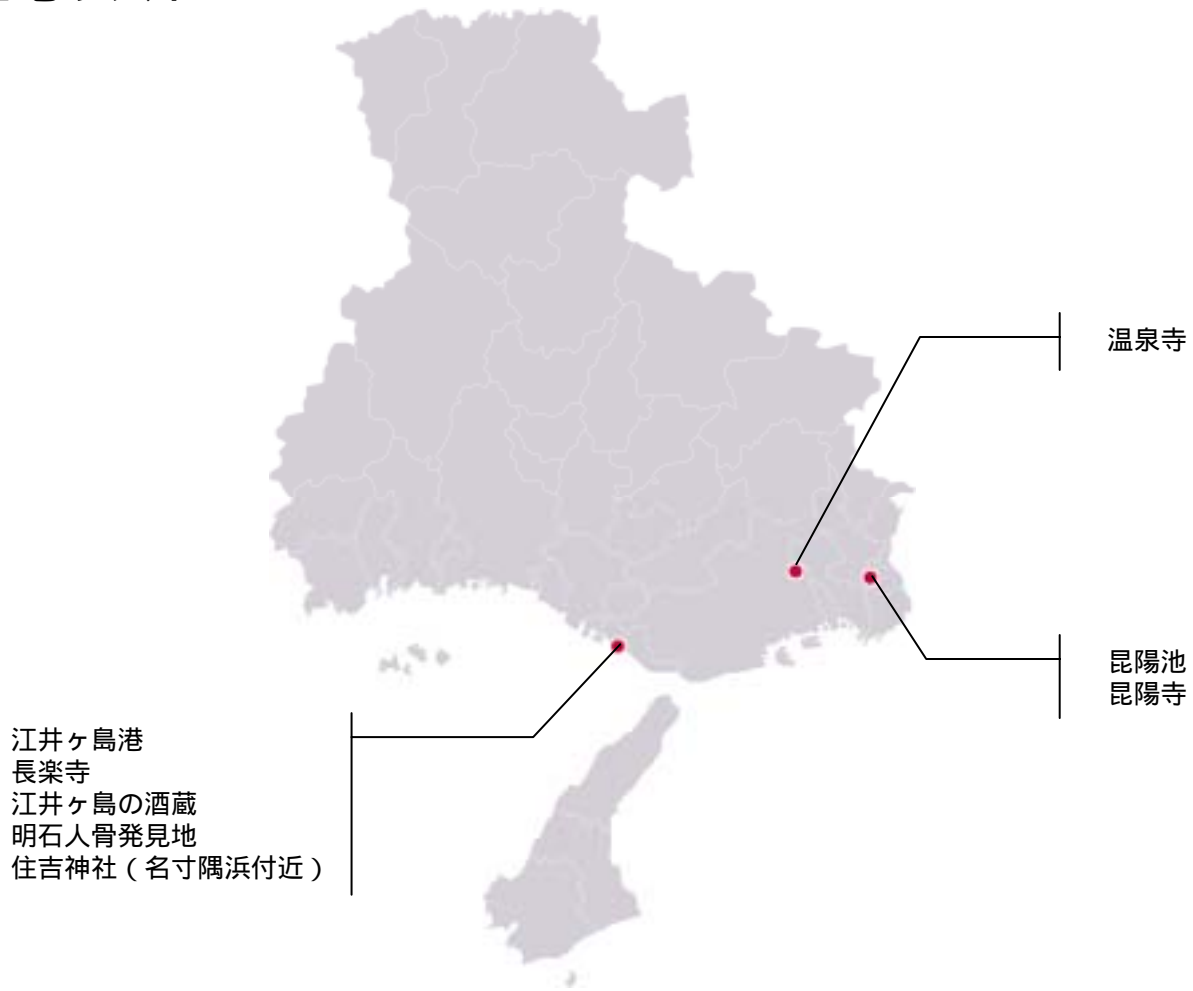
【名寸隅】なぎすみ

万葉集で笠金村（かさのかなむら）が詠んだ浜。明石市大久保町江井ヶ島から、明石市魚住町の住吉神社付近とされている。

参考書籍

| | 書籍名 | 刊行年 | 編著者名 | 発行者 |
|--------|---------------|------|------------|--------------|
| 伝説 | 兵庫の民話 | 1960 | 宮崎修二郎・徳山静子 | 未来社 |
| | 新版神戸の伝説 | 1998 | 田辺真人 | 神戸新聞総合出版センター |
| | 伝説の兵庫県 | 2000 | 西谷勝也 | 神戸新聞総合出版センター |
| 歴史・文化等 | 兵庫県大百科事典（上・下） | 1983 | 神戸新聞出版センター | 神戸新聞出版センター |
| | はりま伝説散歩 | 2002 | 橘川真一 | 神戸新聞総合出版センター |

所在地リスト



| | |
|---------------|---------------------|
| 昆陽池 | 伊丹市昆陽池3丁目 |
| 昆陽寺 | 伊丹市寺本2-169 |
| 温泉寺 | 兵庫県神戸市北区有馬町1643 |
| 江井ヶ島港 | 明石市大久保町江井島 |
| 長楽寺 | 明石市大久保町江井ヶ島448 |
| 江井ヶ島の酒蔵 | 兵庫県明石市大久保町西島 海岸通り付近 |
| 明石人骨発見地 | 明石市大久保町八木字宮西 |
| 住吉神社 (名寸隅浜付近) | 兵庫県明石市魚住町中尾 |

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日